慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	雪橋詩話三集(求恕齋叢書の一)
Sub Title	
Author	田中, 萃一郎(Tanaka, Suiichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1921
Jtitle	史学 Vol.1, No.1 (1921. 10) ,p.161- 162
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東西新史乗
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19211000-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東西新史乘

雪橋詩話三集（求恕齋叢書の一）

山口高商の『東亞經濟研究』に『雪橋詩話』紹介の一篇を寄せた後に初めてこの三集を手にすることが出來た。三集は十二卷で宣統十一年己未二月の金蓉鏡の序并に同仲冬長至日の劉承幹の序があるから思ふに庚申の年に上木を竣つたのであらう。劉承幹氏の序文に著者に就て述べて年二十五登朝不爲晚とあるから楊鍾義氏は光緒十五年に進士に擧げられた時二十五歲であつたのであらう。三集十二卷に予女兄長予一歲。賢明解文字。先君極鍾愛之。選壻苛。年三十始歸於胡とあるが、續篇一卷には癸巳冬余送適胡氏姊至尤溪と見えてる、即ち光緒十九年に楊鍾義氏は二十九歲であつたので溯て考ふれば同治四年の出生で本年は五十七歲である。三集には別に著者の序跋も見えぬが最後に李葆恂の海王村五友歌に盛昱を延鴻閣主人（貝子溥倫）と並べ列られたのを不可とし年輩既殊。淄澠各別。拙著列敍時人。頗具微旨。雅不欲令老韓同傳也とて選述に就ての抱負の一端を洩して擱筆してある。

卷十二に廣東の學海堂堂長であつた陳朗山の言を援いて當事封禁煤廠。工人無所得食。乃倡聚爲盜。蔓延至二千餘人。於平圃汎。用杉艇截江。斷船往來。四出淫掠。南雄韶洲極力堵。遂轉至仁化樂昌。攻城劫獄。白雲山匪徒。屢應拜盟。言之當事殊漠然。庚子辛丑間。倉卒用兵。營伍廢弛。兵不堪用。乃議招募。於是有陸勇水勇。福建勇。潮州勇。東莞勇之名。糜餉無算。和約後。因皆裁撤。無各勇俱無賴輩。無所得食。半流入粵西。蔓延遂成巨寇と既いて居る。庚子辛丑は即ち鴉片戰役の時でこの戰役と長髮賊との關係は實に明瞭となるのである。卷八には愧僞の種類を擧げて終に盡有執大政負時名。甘爲人所牽率而不辭者。望之儼然。何異於盤鈴之一物哉と云ふてる。ロイド・ジョウジ氏と雖も亦盤鈴之一物に過ぎぬのである。卷五には宋の淳化中。青城姜王小波。起謂其衆曰。吾疾貧富不均。今爲汝輩均之。附者至萬餘人と敍して此等邪說。古皆有之。士大夫不讀書。乃有崇信之者。國遂不國矣と斷じた沈匏廬の言を引いてある。今日は王小波の輩が頗る世上に跋扈して居るやうである。明季の宋懷聞の感遇詩に健婦斷指爪。操作厲桑麻。嬋婦長指爪。深閨事鉛華。貧者日以富。富者日以貧。三秋稻粱熟。促織鳴四鄰。唧唧復唧唧。嬋婦貧亦織とある。嬋婦淡む足らず健婦寧ろ愛す可きでは無いか。

又卷六の終に李英の『蘇溝詩鈔』のうちから春明記事詩を抄出してあるがそのうちに玉階行繞殿西廂。校勘分司浴德堂。密室祗平規繭褒。銘盤猶襲御衣香と云ふ一首があつて殿上行走。每集浴德堂。後有浴室。規圓若甕。而屬其頂。傳爲先皇賽赫盧と注してある

る。李英は乾隆九年に袁簡齋の殿試を分校した時の舉人で翌年進士と爲つたのであるからして見ると乾隆の初年には浴德堂後の浴室は雍正帝の齋祓處と云はれて居つたのである、浴德堂開放之説明にも浴德堂。在前清初年。爲詞臣校書直次。其後有浴室。仿土耳其式。相傳乾隆時。爲回妃設。語雖不經而制作極古。又西有亭。隆然而高。亭中有井。井畔鑿石爲槽。直達浴室之後。以鍋承之。鍋熱水沸。則由墻中銅管以注浴室。甚爲可歎。玆訂每屆星期六。及星期日開放。究心掌故之君子。游覽及此。必有悠然神往者矣とあつて香妃の爲に故ら營造したと云ふのは悠然神往の境界に入らんとする游子の想像に任せて置く可きであらう。兎に角この『雪橋詩話』の三集も正續二集と共に支那の研究に志ある人々の必讀の書と云ふ可きである。（田中萃一郎）

『日本古代文化』を讀みて

○

今和辻哲郎氏著『日本古代文化』に就き讀後の感想を氣の付いたまゝに簡單に述べようとするのであるが、其と同時に此小論文は自分の文化史考察の一端ともなるのである。

○

和辻氏の此著に對する批評も既に或る人々に依つてなされたと思ふのであるが自分の觀たのは最近の三田學會雜誌上の野村氏の批評だけである。其れ故今は他の人の批評に付ては全く知らぬのであるが、野村氏の其れも極めて概括的な批評であるだけ著者の眞意を汲み得るものと思はれない。自分は今此の感想を述ぶるにあたつて出來るだけ他の人の批評も斟酌したかつたのであるが差しあたり便宜がなかつたので直ちに筆を下すことにしたのである。無論多くの意味から云つて著者の此の書は不充分な點が多く不滿の多いものである。其れだけまた未完成のものであるに相違ない。例へば其の經濟的方面及び其の政治史的方面の研究の貧弱に思はしめらるゝ如きである。殊に著者としてはもつと吾が古代の氏族的社會組織の發展的樣式をも文化史的に深く意義づけられ得たであらうと思ふのである。然し此も唯だ自分一個の希望であつて其を著者に無理に强いようとするのでは無論ない、著者は此れで十分だといふなら其れでも好い。

此の書の物語る如く著者の目指す點は何であるかは容易く首肯出來る。自分は唯だ此の點に於て著者の意の存するところ、窺へば足ると思ふ。其れ故今は主として此の書の目指す點を明かにし且著者の把握せられんとした日本古代文化の文化史的考察に就て自分一個として感想を述べ同時に自分の希望と要求とを手記しやうとするのである。

本文の批評に入る前に尙ほ一言して置かねばならぬ。今は此の書の內容に就き一々の細かき部分的細論は略する。何となれば文化史的研究にあつては各部分的研究は其の全體の綜合的研究に包括せらるべきものと信ずるからである。其れ故各部分的研究は十分豫想するのであるが全般の上から此を考察に入れようとするのである。從つて此の小論文の目的とする處は著者の一般的綜合的